

# 海外における移民子弟の教育的包摂の課題

宮城教育大学 教育学部

国際教育研究領域 市瀬智紀

[ichinose@staff.miyakyo-u.ac.jp](mailto:ichinose@staff.miyakyo-u.ac.jp)

# 海外における移民子弟（高校生相当）の 教育的包摂の課題について

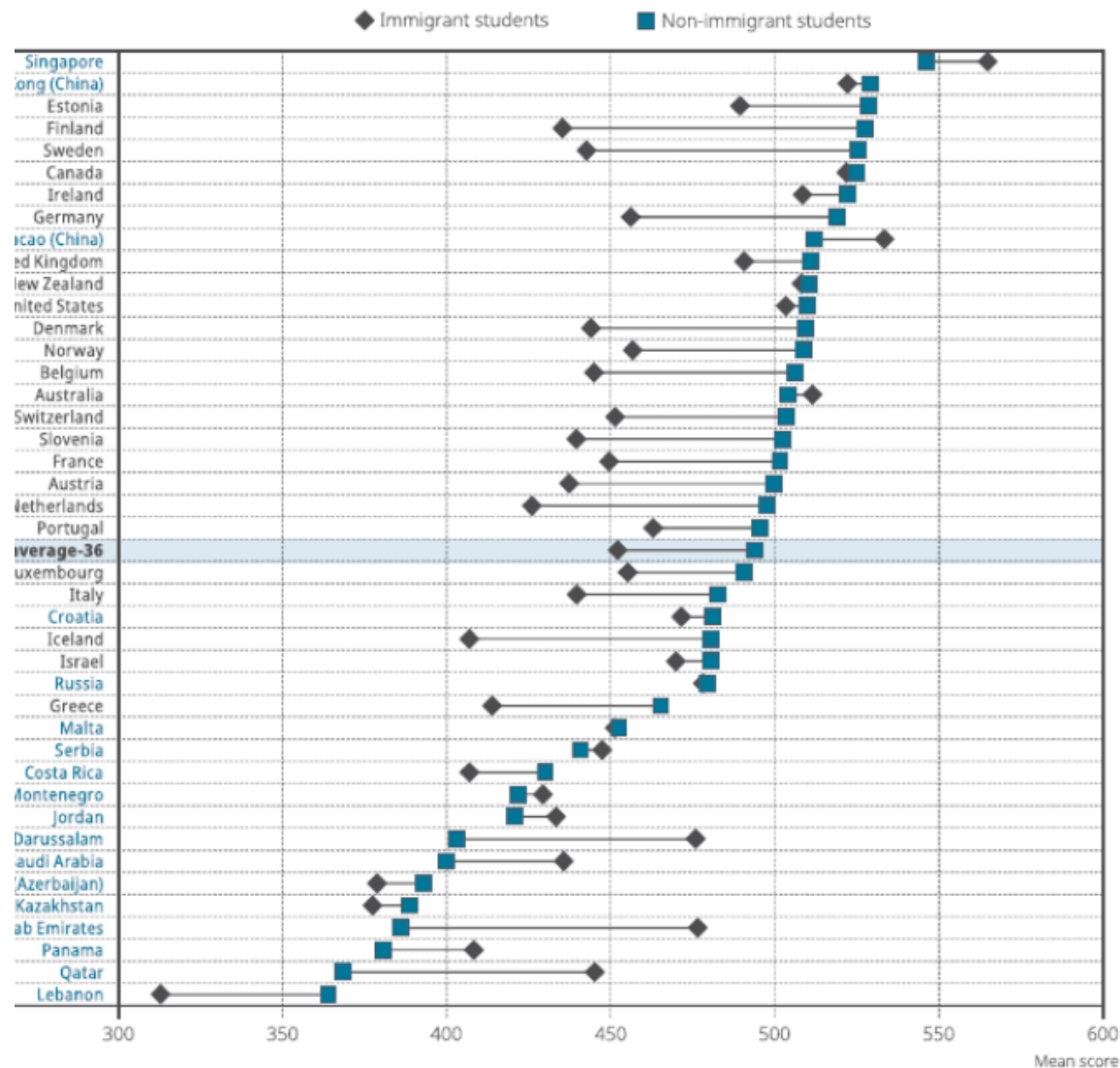
- OECD(2019)は、学習到達度調査（Programme for International Student Assessment 略称PISA）2018の調査結果に基づいて、学校における15歳の移民生徒のWell-beingについて分析している。
- 生徒の幸福の2つの尺度、生活満足度と学校への帰属意識についての調査結果によれば、イタリア、モンテネグロ、パナマ、スペイン、スイス、米国などほとんどの国において、移民の生徒は非移民生徒と比べて、10段階の生活満足度尺度で7段階を超える値を報告した生徒は少なく（すなわち生活満足度が低く）、2つのグループ間の差は7%を超え、その結果は統計的に有意であるとしている。

# 海外における移民子弟 (高校生相当) の学力の課題について

- OECD (2019) は、PISAの結果から移民背景の生徒と移民背景のない(非移民)の生徒(15歳)の読解力について調査している。OECD諸国全体の移民の生徒(15歳)の読解力の平均値は452点で、非移民の学生全体の平均は、それより42ポイント高かった。また、ほとんどの国や地域において、移民の生徒の学力は、非移民の生徒よりも低かったこと明らかにしている(2)。
- また、質問項目の「あなたの家では主に何語で話していますか」にもとづいて、家庭で話されている言語と学力の関係を考察した結果、多くの国において、家庭において学校での教授(指導)言語を話す移民の生徒は、指導言語を話さない移民の生徒よりも読解力が高いことについて言及している。
- 指導言語を話さないことが、高い読解力を獲得する上での障壁となっているため、家庭環境を超えたサポートが必要であると述べている。

# 海外における移民子弟（高校生相当）の学力（読解力）

5 Average performance in reading, by immigrant background



# 外国人児童生徒の包摂とWell-beingについての先行研究

- 日本において外国人児童生徒の包摂とWell-beingについて調査した文献は少ない。中原（2021）は、移民背景といじめの関係についての分析を行っている。TIMSSの2003年及び2007年の小学校4年生を対象としたデータから、外国につながる児童生徒について、家庭における日本語使用の状況といじめ被害の経験割合と日本語の使用頻度の関係について調べた。「家でどのくらい日本語を話しますか」を日本語への適応の度合いとし、適応の度合いが低い状態から高い状態になるにつれて、一時的に「からかい」を受けやすくなり、その後、さらに日本語への適応が進むと「からかい」を受けにくくなっているとしている。

# 外国人児童生徒の包摂とWell-being

- 日本では外国人児童生徒の包摂とWell-beingについて調査したデータがない。そこで、国際数学・理科教育動向調査（Trends in International Mathematics & Science Study 略称TIMSS）の2019年の生徒質問紙にある、学校での包摂とWell-beingに結び付けられる下の質問項目(項目No.13)のデータを再分析してみる。日本とフィンランドの中学校2年生に関し、下の質問項目と、「家でどのくらい日本語／フィンランド語を話しますか」という質問の回答、すなわち家庭で学校使用言語を話す割合との関係を調べた。
  - a) わたしは学校にいるのが好き(Preferable 好意)
  - b) わたしは学校にいると安心できる (Safety 安心感)
  - c) わたしは学校に受け入れられていると感じる(Belongings 帰属包摂感)
  - d) 先生はわたしに対して公平だ(Fairness 公平性)

# 基本データ TIMSS 日本・フィンランド

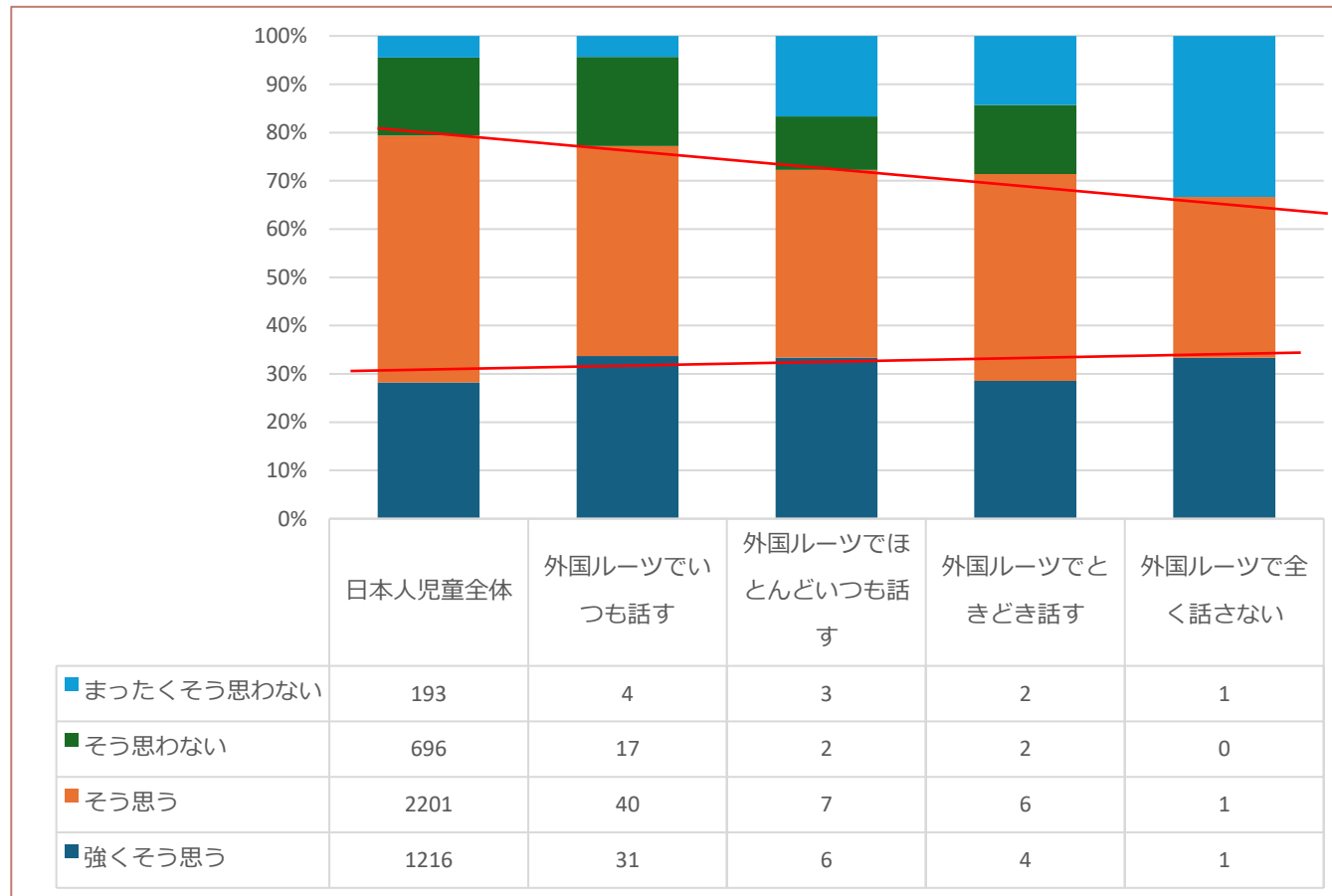
日本	いつも話す	ほとんどいつも話す	ときどき話す	全く話さない
回答全体	4280	113	42	9
母親が日本生まれではない	51	18	11	3
父親が日本生まれではない	39	11	13	2
日本生まれでない生徒数	19	9	7	3
外国につながる生徒数	92	18	14	3
外国につながる生徒割合	2.1%	15.9%	33.3%	33.3%

フィンランド	いつも話す	ほとんどいつも話す	ときどき話す	全く話さない
回答全体	4016	595	164	47
外国につながる生徒数	271	210	139	37
外国につながる生徒割合	6.7%	35.3%	84.8%	78.7%

# TIMMS調査結果

## 外国人児童生徒の包摂とWell-being 日本

- b) わたしは学校にしていると安心できる (Safety 安心感)

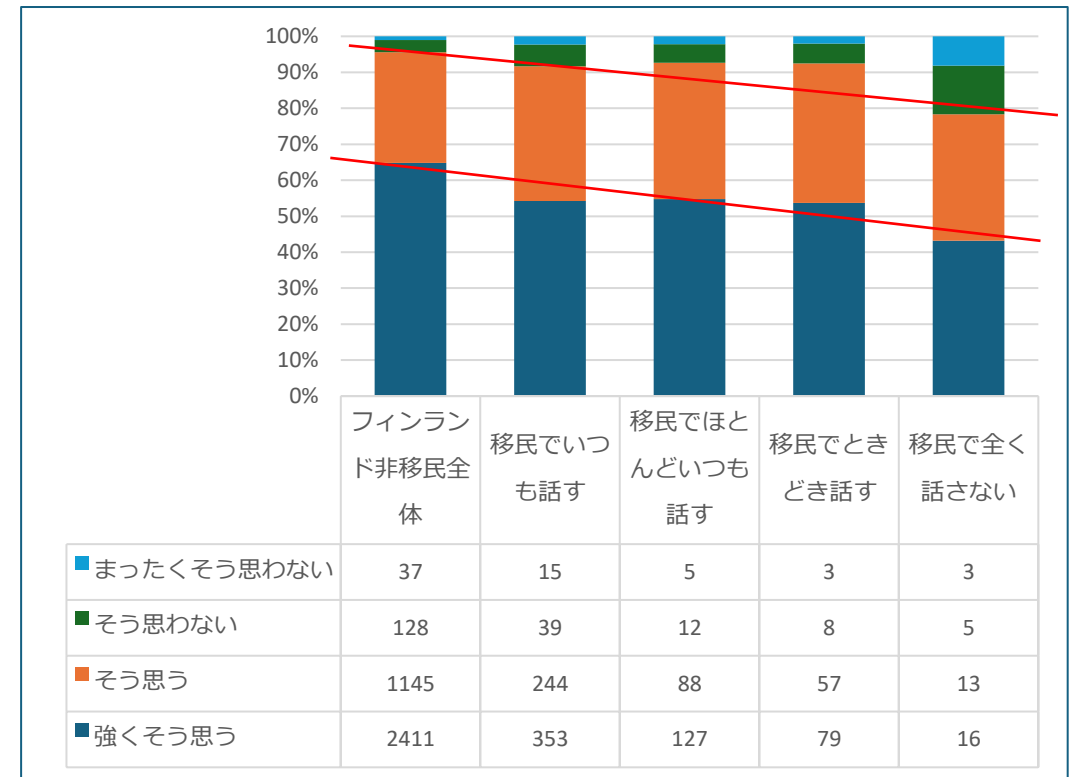
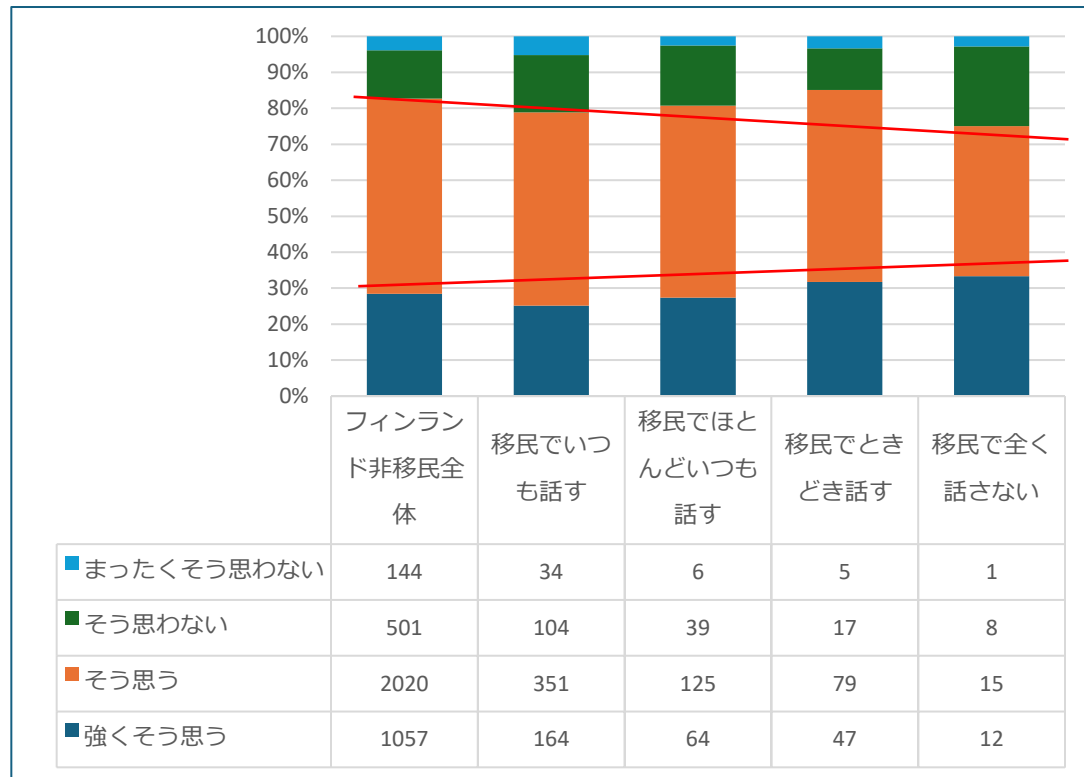


# TIMSS 調査結果

## 移民子弟の包摂とWell-being フィンランド

a) わたしは学校にいるのが好き  
(Preferable 好意)

b) わたしは学校にいると安心できる  
(Safety 安心感)



# TIMSS 調査結果

## 移民子弟の包摂とWell-being フィンランド

c) わたしは学校に受け入れられていると感じる(Belongings 帰属包摂感)

d) 先生はわたしに対して公平だ(Fairness 公平性)

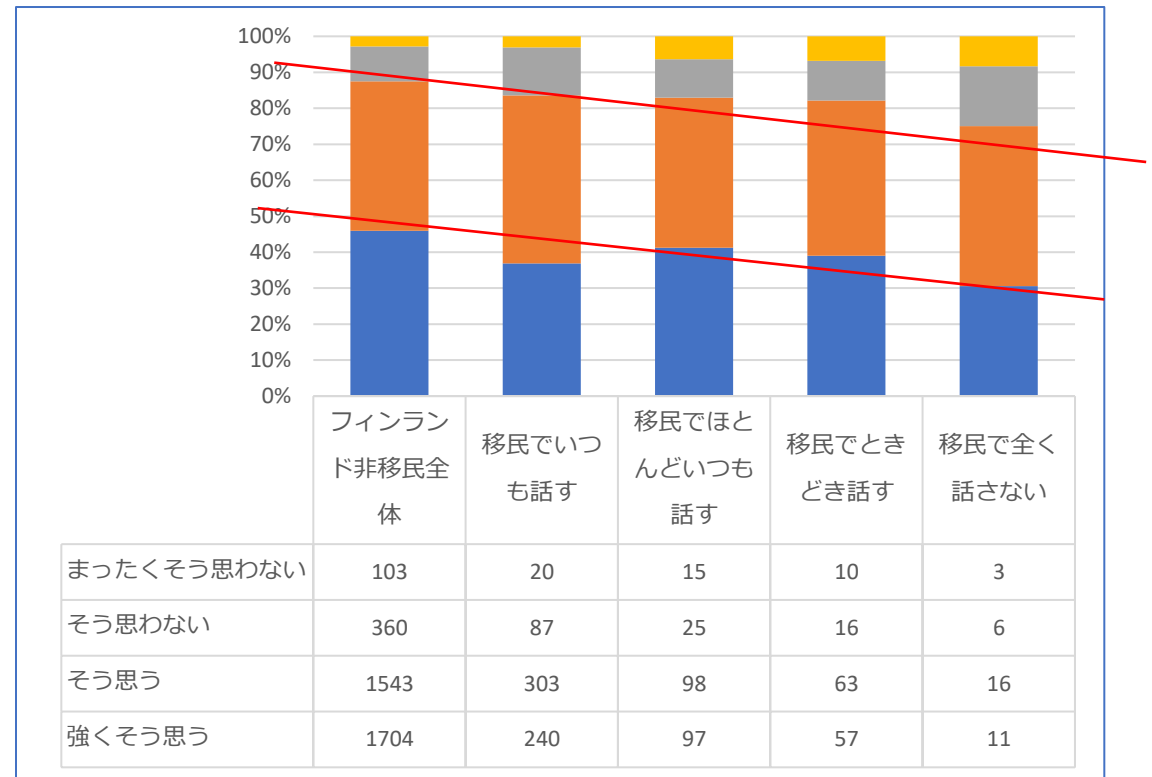
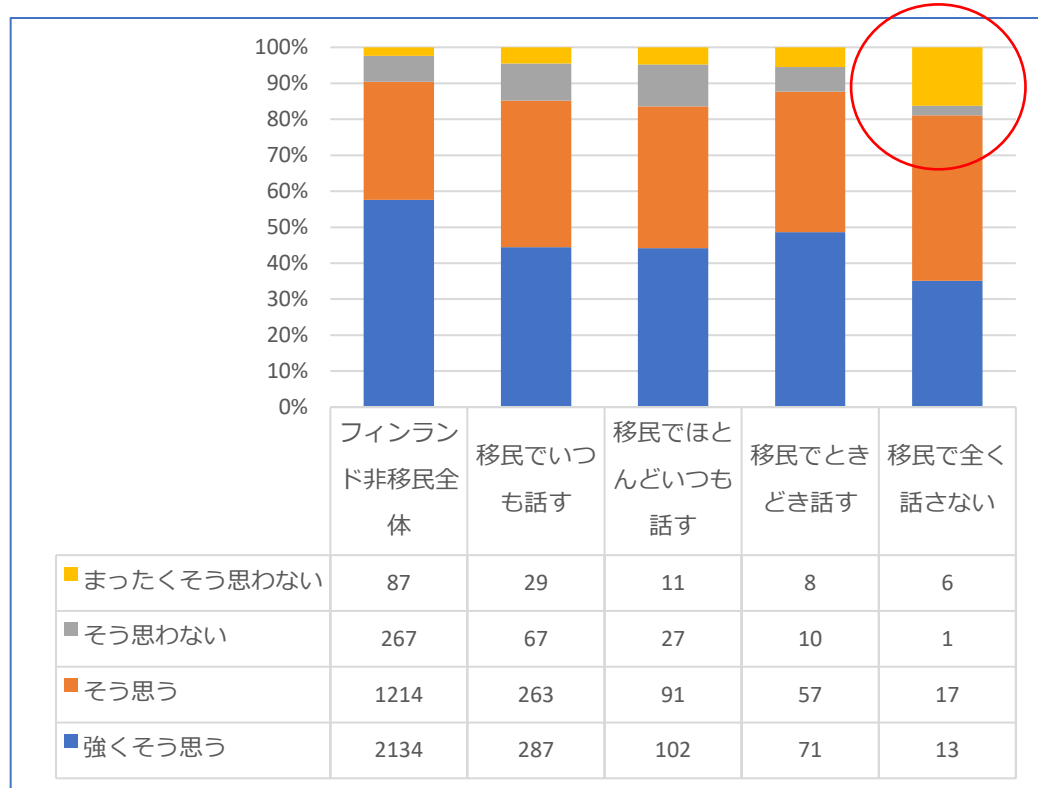
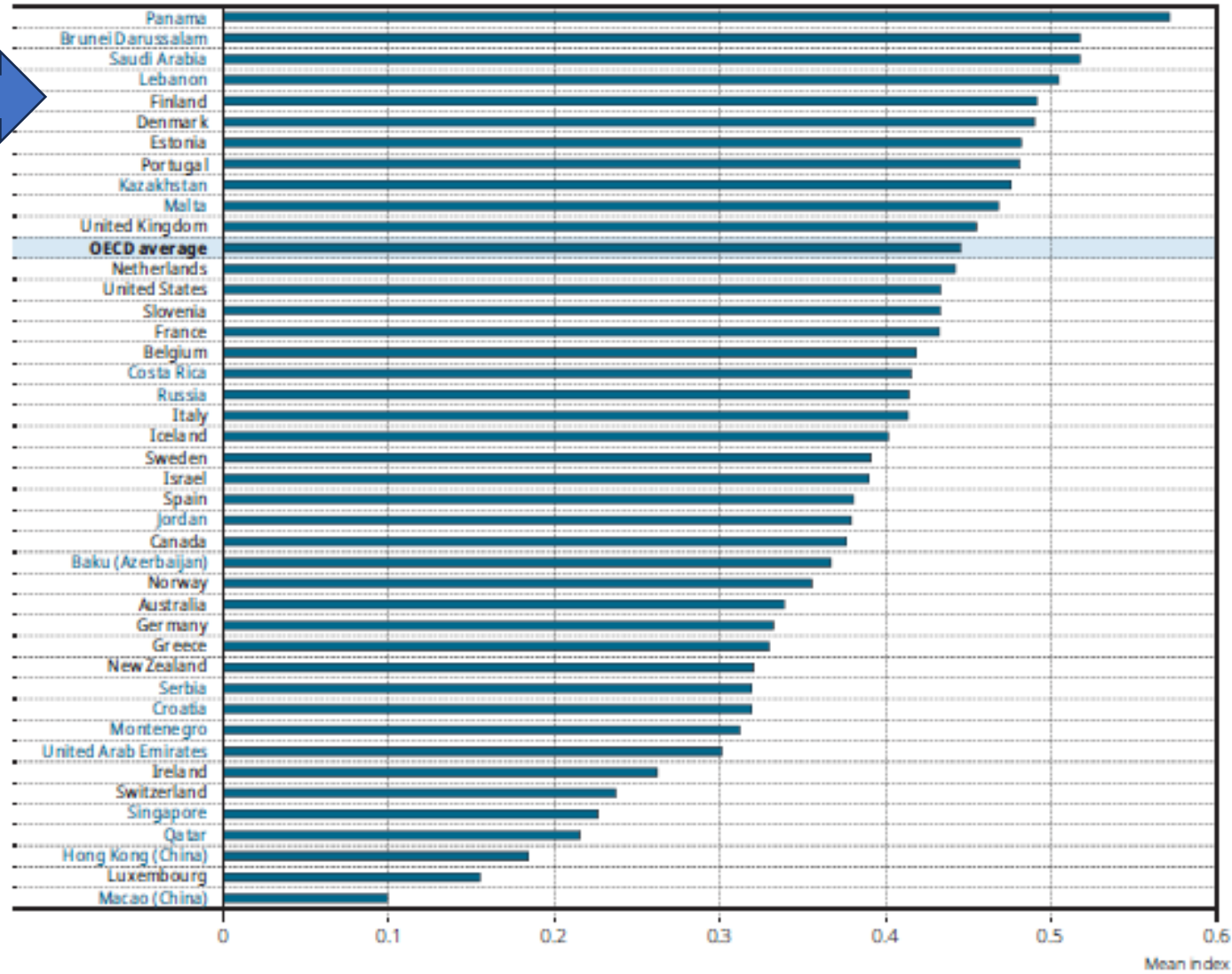


Figure II.9.8 Segregation of immigrant students across countries

Index of isolation of immigrant students in school



OECD(2019)では、移民の生徒だけの学校・教室空間が形成されているケースをSegregation of Immigrant Students in Education Systems（学校システムにおける隔離）として言及している。

**Notes:** Countries where less than 5% of students had an immigrant background are not represented in the figure.

The isolation index measures whether immigrant students are concentrated in some schools. The index is related to the likelihood of a representative immigrant student to be enrolled in schools that enrol not immigrant student. It ranges from 0 to 1, with 0 corresponding to no segregation and 1 to full.

Countries and economies are ranked in descending order in the index of isolation.

**Source:** OECD, PISA 2018 Database, Table II.B1.9.11.

StatLink <https://doi.org/10.1787/888934038362>

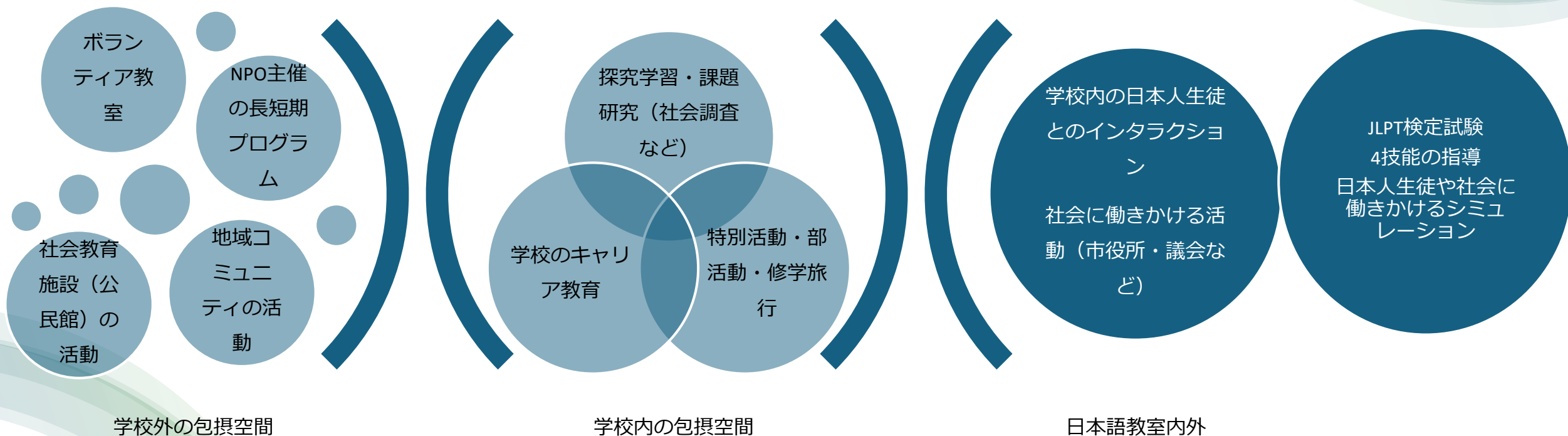
# TIMSS 調査結果から得られる結論

- 家庭で学校の使用言語を話さない移民子弟（保護者が外国人）は家庭での学校言語の使用程度が低いほど、安心感(Safety)や帰属感(Belongings)、公平性(Fairness)を含むWell-beingが低下する。
- 移民子弟は、家庭での学校言語の使用程度が低いほど、教科の学力も低下する（市瀬2024）
- 移民子弟のみの環境であったり、非移民子弟とのインタラクションが求められない教室環境下では、学校言語を使用する機会は限定される。
- 学校と家庭を往復する中で、移民子弟が学校の使用言語を学ぶ機会は少ない。

# 日本語教員の役割

- 日本の学校でも、外国人のみの教室環境や日本人生徒とのインタラクションが求められない教室環境下では、日本語を使用する機会は限定される。さらに、生徒が学校と家庭の往復するのみでは言語使用の機会は閉ざされる。
- 日本語教員には、外国人生徒の学習空間を教室内外に開くこと、そして学校外の社会関係資本を導入する調整役としての役割が考えられる。

# 外国人生徒の教育的包摂を促す空間



# 具体的事例 東京学芸大学(2023)『高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン』

- 教科支援、キャリア教育・支援、多文化共生教育についての事例が多く掲載されている。
- 日本語学習や教科学習においては、日本人生徒との実際のインタラクションや、教科の単元を地域社会と関連付けた学習の展開がみられる。
- キャリア教育においては、地域課題を扱ったり地域企業と連携しながらキャリアを考えたりすることの有効性が示されている。
- 特別活動としては、多文化交流クラブを運営したり、言語文化の多様性を生かすイベントの企画開催されている。
- また、学校と家庭との往復にとどまらず、NPOと連携した放課後の生徒の居場所づくりや、休日を利用した長短期の外国人生徒を包摂する社会的活動の事例が示されている。

---

手引き 大阪府立東淀川高等学校

---

第3部 母語・母文化教育 事例1 集住地区 総合学校高等学校

---

第3部 母語・母文化教育 実践例1 NPO法人フィリピンナガイサ

---

第3部 異文化間教育 事例2 認定NPO法人カタリバ

---

第3部 市民性教育 実践例2 大阪府立大阪わかば高等学校

---

第3部 市民性教育 実践例3 東京都立小山台高等学校

---

大阪府立若葉高校 生野区長との対談

---

東京都立小山台 高校 地域の大人にインタビュー

---

岐阜県立東農高校 ハンバーガーショップとの連携